
クレセント

水城りおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレセント

【Nコード】

N5699N

【作者名】

水城りおん

【あらすじ】

前世の記憶をもつ少女シオン。

体の弱い兄の代わりに男のフリをして入学した魔術学校で前世での幼馴染そっくりの少年と出会う。

これは前世での後悔の記憶に翻弄されつつも今を懸命に生きるそんな少女の物語。

01 誕生（前書き）

PC整理をしていたら以前書き溜めていた未発表の話を発掘しました。

せっかくなのでのんびりですが、修正しつつアップしていこうと思っています。

暇つぶしにでも読んでいただければ幸いです。

01 誕生

貴方には前世の記憶がありますか？

ある日突然前世の記憶が蘇ったら？

もしその前世が別の世界の住人だったら？

これはそんな前世の記憶を持つ少女の物語

聖暦一七六三年。

アマルク大陸にあるアヴァロン王国。

肥沃な大地をもつこの国は世界有数の力ある大国だった。

その肥沃な大地を他国から狙われることも幾度もあったが、アヴァロンには優秀な騎士や魔術師が多く他国の侵略を許すことは無かった。

近年は賢王と名高いセルジオ王の力もあり平和な時が続いていた。二年前には待望の王子も誕生し国中に喜びが溢れていた。

そんなアヴァロンでも魔術の名門と名高いファシル公爵家。

公爵家では今まさに新しい命が誕生しようとしていた。

現当主のアロルドⅡファシールは部屋の前をうろうろと落ち着かない様子で歩き回っていた。

「父上、母上も産まれて来る僕の弟か妹も大丈夫ですから落ち着いてください」

「あ、ああ・・・そうだな」

まだ四歳になったばかりの息子リオルに窘められ、アロルドはなんとも複雑な心境だった。

しばらくして、部屋に大きな泣き声が響く。

その声は部屋の外で今か今かと待ちわびていたアロルドとリオルにも届いた。

すぐに産婆に部屋へと招き入れられ、告げられる。

「おめでとうございます、元気な女の子ですよ」

「おお、イエシカよくがんばったな。お疲れ様」

ベッドに横になった公爵夫人であるイエシカの隣には産まれたばかりの赤ん坊。

この世界には珍しい、とても綺麗な黒髪の赤ん坊だった。

「この子が僕の妹・・・父上、母上、この子の名前は？」

「うむ・・・そうだな・・・」

リオルは愛しそうに妹を見つめ、両親に尋ねる。

腕組みをして考えるアロルドにイエシカが告げる。

「この子の名前なんですけど、シオンというのはどうでしょう」

「シオン？まるで男の子のような名前ではないか？」

「ええ、でもこの子を抱いた時に感じたのです。この子はシオンなんだと」

イエシカは魔術師ではなかったが不思議な力の持ち主だった。

外を歩けば小動物が彼女に寄ってきたり、彼女が道端のつぼみに触れれば花開いたり。

またあるときは予言めいたことを言い、その言葉が現実となったこともあった。

アロルドはそんな彼女はこの世界に愛された存在なのではないかとすら感じていた。

「お前が言うのならばきつとそうなのだろう。よし、この子はシオン、シオンⅡファシールだ」

アロルドが赤ん坊を抱き上げ宣言する。

こうして赤ん坊はシオンと名づけられ、ファシール公爵家の一員として正式に迎えられた。

02 異変

シオンは暖かい家族の元、すくすくと成長していった。

異変が訪れたのはシオンが三歳になったある日のこと。

その日は朝から天気が悪く激しく雨が降っていた。

その日は父も兄も用事があって出かけていて不在。

母は不在の父の代わりに客人の対応に追われていた為、シオンは一人で遊んでいた。

悪天候の為、外で遊ぶこともできない。

そんな時の彼女の遊びは屋敷の離れにあった小さな塔を探検すること。

もう何度も登っていたが、毎回新しい発見がありとても楽しい遊び場だった。

塔の最上階へと到達した彼女目に留まったのは小さな窓。

シオンはその時、先ほどまで聞こえていた雨の音が聞こえないことに気がついた。

雨がやんだのならば外で遊べるかもしれない。

そんな期待を胸に近くのを踏み台にして窓を開け、顔を出して外を眺める。

しかし雨はまだ降り続いていて、がっかりしたのだった。

その瞬間。

シオンの目の前、塔の横にあった木に雷が落ちあつという間に炎が燃え上がった。

「うつ・・・」

突如ズキンという激しい痛みがシオンを襲う。

雷にも燃え上がる炎にも触れたわけではなく怪我などをしたわけではなかった。

動悸が激しくなり、うまく息をすることもできない。

頭の奥底に響くような激しい痛みにしばらく耐えていたシオンだったが、痛みは治まるどころか次第に酷くなっていく。

あまりの痛さと息苦しさにシオンの意識は朦朧とし、ぐらりと体が傾いた。

その時のシオンは窓から乗り出すように顔を出して外を眺めていた。大人と違い小さな子供は重心が偏りバランスが悪い。

あつという間にバランスを崩した体は重力に逆らうことなどできず窓から落下していく。

「シオン！」

息子の叫びにつられ視線を移した父の目に飛び込んできたのは塔の窓から落下する愛娘の姿。

アロルドとリオルはちょうど外出先から戻ってきたところだった。

先に動いたのはリオル。

運のよいことに塔は池のほとりに建っており、水がクッションとなりシオンを受け止めた。

しかしシオンの意識はすでになく、彼女の体はそのまま池の底へと沈んでいく。

リオルは躊躇うことなく池へと飛び込んだ。

リオルの手がシオンへと届いた瞬間、水が二人を避けるかのように割れる。

「大丈夫かっ!？」

「はい、気を失っていますが大丈夫です」

それはシオンとリオルの父、アロルドの魔法によるもの。

アロルドはさつと意識の無いままのシオンを抱き上げ、リオルと屋敷へと戻った。

屋敷の入り口では公爵夫人である母イエシカが外の騒ぎに気づき、様子を見に行こうとしているところであった。

家人に自分達が見てくるから待っているようにと諭されていたが、シオンの姿が見えなかったので自分が行くと少々揉めていたらしい。イエシカはぐったりとした娘を見て小さな悲鳴をあげたが、気を失っているだけで無事だとわかるとすぐにシオンを休ませる準備を整えた。

そしてシオンを助けるために池に飛び込んだ少々体の弱いリオルの異変にも気づき、シオンが目覚めるまでそばにいますと言うリオルにも休むようにと諭す。

念の為医者も呼ばれたが、シオンにはどこも異常はなく、じきに目が覚めるであろうということだった。

シオンを助けるために池へと飛び込んだリオルは少々体が弱かったこともあり、熱をだしてしまった。

しかしリオルも大したことは無く、医者は熱ざましを処方して帰っ

ていった。

屋敷も落ち着きを取り戻し、家人たちはそれぞれ自分の仕事へと戻る。

アロルドも子供達が目を覚ますまで付いていたが仕事が残っていたので子供達をイエシカに頼み、部屋で仕事をこなしていた。

イエシカはその晩ずっと子供達のそばを離れることなく看病を続けていた。

03 記憶

「俺って飛行機乗るの初めてなんだよね。落ちたりしない？」

「墜落する飛行機に乗る確率は宝くじで一等を当てるよりずっと低いよ」

「それはそうなんだろうけど、ね」

そういつて照れたように笑うのは藤崎 臣（ふじさき じん）。

そんな幼馴染を飽きたように眺めるのは東堂 紫苑（とうどう しおん）。

「どうして臣の用事に私が付き合わされるんだ・・・お使いぐらい一人で行け。子供じゃあるまいし」

「紫苑、お前も同じ場所で用事があったんだから別にいいだろ」

臣は父の経営する病院の分院へ出張している父に届け物をする為、紫苑はその病院に入院している祖母のお見舞いに行く為に飛行機で移動していた。

紫苑の両親は紫苑が小学生になった年に他界していて身内は祖母のみ。

その祖母も高齢で、紫苑が中学生となる直前に体を壊し入院してしまった。

他に身内のいなかった紫苑は施設に入る事になったのだが、そこへ現れたのが臣の両親だった。

紫苑を自分達が世話をしたいと申し出、さらに紫苑の祖母の入院の出助けまでしてくれた。

こうして紫苑は藤崎家に居候することとなり今に至っている。

自分達の娘も同然に愛を注いでくれた臣の両親に、どれだけ感謝しても足りないぐらいだった。

紫苑と臣は同じ年であったこともあり、自然と同じ学校に通うことになった。

紫苑は勉強はそれほど得意ではなかったが、運動は得意だった。

臣は勉強も運動も万能で顔もよかった為、女である紫苑がムカつくほどよくモテた。

ムカつく理由は、幼馴染でしかも一緒に住んでいるからという嫉妬を受けるのが面倒だという色気の無い理由だったが。

離陸して三十分ほどたった頃、ソレは起きた。

突然機体が激しく揺れ、人々の悲鳴が上がった。

窓からみえるのは炎を上げた飛行機の左翼。

機内は騒然とし怒声やすすり泣く声が聞こえた。

紫苑の心臓はばくばくと痛いほど激しく鼓動を刻む。

どうしてよいかわからずに隣に座る臣に顔をむけると、じっと紫苑を見つめる臣と目が合った。

「怖い？」

そう尋ねる臣の声色は落ち着いていて優しかった。

うまく言葉が出せずに頷くことしかできない紫苑の手を臣がぎゅっと握る。

痛いほどの鼓動がずっと収まっていくのを紫苑は感じた。

「俺も怖い。でも紫苑を守れないかもしれない事のほうがもっと・
」

臣の言葉を最後まで聞くことはできなかった。

激しい爆音と共に紫苑の視界は一瞬で真っ赤に染まり、そして途切れた。

最後に見たのは悲しそうな表情の臣。

どこまでも沈んでいく感覚の中、紫苑は思う。

（ばあちゃん悲しむだろうな・・・それに臣の両親になにもお返しができていない・・・）

きつと自分は助からない。

現実味は無かったがあれは間違いなく現実、そう感じていた。

（臣・・・）

ずっと一緒にいた幼馴染。

まさかこんな形で別れが来るなんて思いもしなかった。

もつとすべきことがあったんじゃないか。

もつと自分にできることがあったんじゃないか。

紫苑は後悔の念に押しつぶされそうだった。

不意に沈んでいた意識が暖かいものに包まれ、白く弾けた。
そこで紫苑の意識は完全に途切れ、そして消えた。

それは紫苑が十六歳の春の出来事だった。

04 覚醒

沈んでいた意識が浮上する。

体がとても重く感じ、頭は痺れた様にジンジンと痛む。

自分は一体どうなってしまったのか。

はっきりしない意識の中で考えをめぐらせる。

脳裏に浮かんだのは幼馴染の少し悲しそうな顔。

「臣ツ・・・！！」

叫んで目が覚める。

やはり体は気だるく、思うように動かすことができない。

「シオン・・・？」

声をかけたのは夜通しの看病疲れでうとうととしていたイエシカだった。

まだ痺れたようにはっきりしない意識と視界に映ったのは、心配そうに覗き込む大好きな母の姿。

「あ・・・かあしゃま・・・？」

「よかった、気が付いたのね」

シオンはまだうまく力の入らない体を起こし、母を見つめた。
その時部屋の外をバタバタと走る足音が響き、勢いよく部屋の扉が開かれる。

「何事だ!？」

飛び込んできたのは方で息をするアロルド。
シオンの叫び声を聞き、走ってきたようだった。

「ちょっと怖い夢を見ただけよね、シオン？」

「あ・・・はい」

「ほらあなた、まだ日が昇るまでしばらくあります。リオルも落ち着いて眠っているのですから」

「う、うむ。そうだな」

さあさあとイエシカに促され、アロルドは執務室へと戻っていった。
そんな両親をシオンはあっけに取られ眺めていた。

アロルドを送り出し戻ったイエシカは穏やかな笑みを浮かべたまま
シオンの隣に座り尋ねる。

「ところで・・・さっきあなたが叫んだジンというのは？」

懐かしい名前にシオンの意識は一気に覚醒する。

それと同時に紫苑であった時の記憶があふれ出し、ぽたりと涙が零れ落ちるのをとめることはできなかった。

「懐かしい・・・友人の名前・・・です」

突然はつきりした娘の口調に驚いたイエシカだったが、その驚きは
すぐに消えいつもの微笑みへと変わる。

「そう・・・まだ朝には早いわ。もう少し休みなさい」
「はい・・・」

ふとシオンがリオルへ視線を向けると、ほんのりと赤い顔の兄が眠っていた。

「リオル兄様、熱が・・・？」

「あなたを助けようと池に飛び込んだの。もう微熱程度だから心配ないわ」

「兄様・・・」

「さあ、もう休みなさい」

また日が昇ったら様子を見にくるわねと言い残し、イエシカは自室へと戻っていった。

静けさを取り戻した部屋の中。

シオンはベッドに横になり、目を閉じて考えていた。

『シオンⅡファシール』それが今の自分。

『東堂 紫苑』それも間違いなく自分。

きっとあの事故で自分は死んでしまったのだろうとシオンは思う。

今のシオンは『シオン』と『紫苑』の記憶を併せ持った状態となっていた。

シオンの中で紫苑の意識が覚醒したとでも言うべき状態。

最後に感じた後悔。

あの後どうなったのかを知る手段はシオンには無かった。

（もう・・・あんな後悔はしたくない・・・）

シオンとしての人生を後悔することなく生きる。

シオンは三歳にして『悔いない人生を送る』というとても子供らしくない夢を持った。

翌朝リオルの熱もすっかりと下がり家族で朝食を取った際に、舌っ
たらずであったシオンの口調がはつきりしたことにアロルドとリオ
ルはひどく驚いていた。

紫苑の意識が覚醒したシオンの精神年齢はもう三歳児ではなくなっ
ていたのだから当然といえば当然だ。

しかしイエシカに「乙女はちよつとしたきっかけで大変身するのよ」
と夢見がちに諭され、しぶしぶ納得したのだった。

（この家の一番の実力者は母様か・・・どこの世界でも女は強し、
ってことかな）

すっかり大人びてしまったシオンはそんなことを思いながら、大好
きなホットミルクを飲み干した。

05 夜会

「お城でパーティー？」

ある日の昼下がり。

その日はアロルドの仕事も落ち着いていたので、父と兄妹は三人でお茶を楽しんでいた。

その時シオンは四歳となっていて、かなり大人びた賢い子供として認識されていた。

シオンは器用な性格ではなかった為、子供らしい振る舞いができなかったのだ。

「それはいつです？」

リオルはすでに社交界デビューしており、その世界の知識もシオンよりずっと豊富だった。

さらにすでに魔法の才能を開花させており、その将来を有望視されている。

「それが、今晚なんだ」

「え、しかし母様は・・・」

イエシカは数日前にひいた風邪をこじらせて寝込んでいた。大したことはないのだがパーティーには出席できる状態ではなかった。

「そこでだ。今回はシオンを連れて行こうかと思うんだが」

「私ですか？」

「確かにシオンはとても可愛らしく落ち着いた子ですから問題は無

いでしょうか・・・」

リオルの兄バカ発言に苦笑しつつ、シオンは疑問に思う。

「それにしても急すぎるような気が・・・」

普段王城でのパーティーは警備の準備などもあるので前もって予定が組まれており、今回のように突然の開催はかなりめずらしい。シオンのつぶやきにアロルドは大きくため息をつく。

「セルジオのやつが前々からシオンに会ってみたいと煩いんだよ」

「そういえば父様は今日城に行かれたんでしたよね」

「ああ・・・その時にセルジオに会ってな。イエシカが風邪をこじらせた事を話したんだ」

「ああ・・・それで・・・」

アロルドはセルジオ王と学生時代からの親友であった。その為賢王と名高いセルジオ王の性格を熟知している。

「あいつシオンに会いたいがために無理やりパーティーを開催しやがったんだよ」

「父様、口が悪くなってますよ」

「いいんだ、相手はセルジオだからな」

アロルドは、はあと大きくため息をついてシオンに尋ねる。

夜会では既婚の参加者はたとえ正式な相手でなくともパートナーと共に参加するのが常識となっていた。

その為アロルドは急遽一緒にパーティーに参加する相手を探さなくてはいけなかった。

しかしパートナーは異性であれば年齢などに問題はないという形だ

けのものだったのだが。

「どうせ断ってもまたしつこく誘いがくるだろうからな。一緒に行ってくれるかい？ シオン」

「父様が一緒ならよろこんで」

性格は大人びていたが、外見はまだまだ子供らしく愛らしい娘が微笑む姿を見てアロルドは誓う。

「セルジオの毒牙から必ず守ってやるからな」

「父様、一応あちらは国王ですから落ち着いて」

少々興奮気味なアロルドはまだ八歳の息子に窘められていた。

シオンはそんな家族を眺めながら、まだ見ぬお城でのパーティーに思いを馳せていた。

夕刻となり、アロルドとシオンが王城へと向かう時間となった。

せめてドレスだけは私が選ぶと起きだしたイエシカはドレスアップした娘を満足げに見つめ、再び床へ戻った。

正しく玄関まで送り出すと駄々をこねた為、リオルに強制的に連れ戻された。

「それじゃあ行ってくる。イエシカを頼んだよ」

「はい、父様」

リオルはアロルドの言葉に大きく頷き、そしてシオンにやさしく微笑みかけそっと耳打ちする。

「父様と王様のケンカに巻き込まれないようにね」

ぷつとシオンが噴出すとリオルはいたずらっ子のようにウインクする。

「母様のことは僕がついているから心配しないで大丈夫。楽しんでおいで」

「はい、兄様。いつてきます」

リオルに見送られながら、アロルドとシオンの乗る馬車は王城を目指し出発した。

ファシル公爵家の治める領土は王都に隣接しており、城までさほど時間はかからない。

あっという間に馬車は城へと到着し、簡単な手続きの後王宮内へと招かれた。

まだパーティーの開催時刻まで少々余裕があったが、会場内にはすでに多くの客があふれていた。

アロルドの姿を目にした客人たちが次々と挨拶をしようと集まってくる。

「すまないシオン。すこしそちらで待っていてくれ」

「はい、父様」

「はぐれてしまうから決して動かないように」

「はい」

ファシル公爵家はアヴァロンでも上位の名門家であった為、すこしでも繋がりを持とうと多くの人間がアロルドを取り囲む。

シオンはすっかり人に酔ってしまい、父の申し出にうなずくとふらふらと壁際へと移動していった。

（やっぱりこういうのは向いてないな・・・）

シオンが小さくため息をついた時、会場内に歓声が起こる。
どうやらセルジオ王が開場へ現れたようだった。

まだ小さなシオンには開場中の人々が一斉に移動したかのように見えた。

実際四歳のシオンの身長は大人の腰程度しかない。
そんなシオンの視界は女性のドレスのスカートであっという間に塞がれ、移動する人波に飲まれる。

「うう・・・ここドコ・・・」

やっこの思いで人ごみから逃れたシオンだったが、気が付くと見覚えのない通路に立っていた。

いつパーティー会場の広間から外に出てしまったのかもわからない。
人に酔って気分は最悪といってもいいほど悪くなり立っているのも辛く、その場に座り込んでしまった。

06 月下

「おい、大丈夫か？」

不意に声をかけられシオンは顔を上げた。

覗き込んでいたのは蜂蜜色の髪の少年。

少し休んだことで気分もかなりよくなってきていた。

「大丈夫・・・」

答えようとしてシオンははっとした。

こちらを心配する様子の少年の顔色はあまりにも悪い。

「あなたこそ大丈夫？ 私よりずっと顔色が悪いわ」

「俺は大丈夫・・・だ」

少年の息は荒く、立っているのも辛そうな様子だ。

シオンは少年を自分の隣に座らせ、少年の額へ手を当ててみる。
当てた手から感じる熱。

「熱がある・・・ちゃんと休まない・・・」

「俺は将来・・・人を守るべき立場の人間・・・こ、れぐらいで・・・」

少年はまっすぐ前を見つめ、しかし辛そうに答える。
シオンは当てていた手でぺしっと少年の額を叩いた。^{はた}

「自分すら守れない人間に他の人を守るわけないじゃない」
「なっ・・・！」

「無理をするにしても時と場合によるのよ。たかがパーティーの為にそんな状態で出ようとするなんてバカバかしいわ」

シオンはぽかんとする少年を尻目にすくっと立ち上がる。

「誰か人を呼んでくる。あなたはそこで大人しくしてて」
「必要、ない・・・」

行くとするシオンの腕を少年が掴む。

シオンはその手を振り払い、少年を振り返る。

「あなたが無理をしてがんばったって、あなたのことを大切に思う人は喜ばないわ」

シオンは大切だった人達を思い出していた。

それは紫苑であったころの両親。

紫苑の両親は仕事で忙しい毎日を送っていた。

そんな忙しい両親が紫苑の誕生日だからと無理をして仕事を早く切り上げ帰宅した。

しかしその帰宅途中に両親の乗った車は事故にあってしまった。

居眠り運転する車が対向車線をはみ出して両親の運転する車に衝突した。

普段の状態であれば避けられたかもしれない。

自分の為に仕事で無理をしたから避けられなかったのかもしれない。
答えてくれる人はもういない。

それは小学生だった紫苑には辛すぎる出来事だった。

シオンの目には涙が溜まって今にも零れ落ちそうになる。その涙をぐっと拭い、人の声がする方へと歩いていった。

残された少年は息をつき窓から空を仰ぐ。

雲の合間から三日月が顔をだし淡い光で照らしていた。

「確かに・・・あの父上ならば・・・喜びはしない、か」

少年は父の顔を思い浮かべ苦笑し、素直に今日は休ませてもらおうと思った。

そして自分に説教まがいのことを言った自分よりずっと幼い少女を思い起こす。

彼女は自分の事を知っていたのだろうか。

知らなかったからこそいえた言葉なのかもしれない。

あの様子ならそんなこと関係ない、というのかもしれないが。

シオンは手近な大人を捕まえて少年のことを話した。

どうやらちょうどその人は少年を探していたらしく、シオンに礼をいうと慌てて駆けていった。

あつという間に行ってしまった人の背中を眺めつつ、道を聞けなかったことに気づく。

しかたなくしばらく歩いていると、慌てた様子のアロルドに発見され無事保護されたのだった。

アロルドに連れられ会場へと戻ると、すでにパーティーは終盤を迎えていた。

シオンは主催である王に挨拶していないことを思い出し、しゅんと

うな垂れる。

「シオン、パーティーが終わった後にすこしだけ寄り道をしてもいいかい？」

「はい・・・」

その後パーティーはつつがなく終了し、人々は岐路へ着く。

その中をアロルドはシオンの手を引き人波に逆らって歩いた。会場を出て王宮へと入っていく。

一般の客は入ることが許されない場所だ。

しかしアロルドは警備の人間に軽く挨拶をしただけで、あっさりと客室へと通された。

「父様・・・」

「許可がでているからすんなりと入れてもらえるんだよ」

不思議そうな顔をするシオンにアロルドが答える。

しばらく待っていると、部屋にセルジオ王その人が現れた。

「あ・・・」

「よくきてくれたね」

声をかけられ、シオンは我に返り立ち上がり一礼する。

「シオンⅡファシルと申します。お目にかかれて光栄です」

「頭を上げなさい。ここは公式の場ではないから堅苦しいのは無しで頼むよ」

「え・・・ですが・・・」

あっけらかんとした口調で言われ、シオンはどうしていいかわから

ず視線を父へと泳がせる。

そんな二人を見てアロルドは大きなため息をついた。

「王に言われたからといって、はいそうですかといくわけがないだろう。大体お前はいつもいい加減で・・・」

「それよりシオン、ずっと君に興味があったのだよ」

「はぁ・・・」

愚痴っぽくなったアロルドを無視してセルジオ王はシオンへと話しかける。

「本当ならば息子にも合わせたかったのだが、どうやら風邪を引いたようで今日はもう休んでいる。残念だが楽しみはまたの機会にとっておくでしょう」

「息子についていてやらなくていいのか？」

「あれには王妃がついているからな。俺は邪魔だと追い出されたよ」

その言葉にアロルドも思い当たる節があったようで、ぽんと王の肩に手を置いて頷いていた。

その後しばらく王と他愛もない会話をしていたアロルドが娘の異変に気づく。

シオンの頬は上気し息も荒い。

額に手を当てればじんわりと熱かった。

「熱がでてきているようだな・・・」

「それはいいかな。早く戻って休ませたほうがいい」

「ああ、悪いがそうさせてもらう。お前が息子から病原菌を持ってきたんじゃないだろうな、まったく・・・」

ぶつぶつといいながらもアロルドはシオンを抱き上げ急いで岐路に

着いた。

あわただしく帰っていく友人を送り出し、セルジオ王はにんまりと笑みを浮かべていた。

「くくっ・・・黒髪の少女・・・間違いなくシオンのことだろうな」

普段から真面目で無理をする王子が、突然今日は体調が悪いので休ませてほしいと言ってきた。

そして黒髪の少女はこの家の人間かと訪ねられた。

「さすがアロルドの娘、面白い」

何があったのかまではわからないが、それはセルジオ王にとって好ましい出来事だった。

07 転機

その晩シオンは夢をみた。

迫り来るカラフルな色の壁。

むせ返るような香水の臭い。

息苦しくてそこから逃れようともがく。

「シオン」

名を呼ばれ目が覚める。

そこには心配そうに覗き込むリオルがいた。

「怖い夢でもみた？」

セルジオ王に呼ばれていたこともあって自宅へと戻ったのはすでに深夜となっていた。

ずっと気を張っていたシオンは帰りの馬車の中で疲れて眠ってしまった。アロルドがベットへと運んだのだった。

精神年齢は十六歳でも実年齢は四歳で、普段であればすでに休んでいる時間でもあったので当然といえば当然のことだったのだが。

二人の帰りを待っていたリオルが聞いたことはシオンが迷子になった事、帰る前に王に会ったという事だけだったが、父も疲れていることがわかっていたりオルは明日シオンから話を聞くつもりだった。その為リオルはシオンに何があったのか知らなかった。

「カラフルな壁に押しつぶされる夢・・・」

「カラフルな壁？あぁ・・・そうか」

「兄様？」

リオルにはその壁が何のことなのか、容易に想像できた。

そしてシオンが迷子になってあろう理由も。

それは以前リオル自身もそんな壁を体験した事があったからだった。

「その壁というのは、きっと夜会に招かれたご婦人方のドレスのスカート部分だろうね」

「スカート・・・？」

「シオンの身長だと、目線の高さはちょうど婦人方の腰の下ぐらいまでしかないからね」

そういえば、とシオンは思う。

アロルドとはぐれた時のシオンはスカートの壁に視界を奪われ、人波に飲まれてしまった。

とても息苦しくて必死に人を掻き分けて進んでいたところ、気づいた時には会場ではない場所にいたのだった。

リオルはむうっと考え込むシオンをなだめ、再び眠るように促す。
疲れていたシオンはリオルが頭を撫でるのを心地よく感じながら再び眠りについた。

「おやすみ、シオン」

シオンが眠ったのを見届け、リオルは自分も眠りについた。

後日。

「どうしてだい、シオン？」

アロルドは呆然とした様子で小さなドレスを抱えていた。それは新調したばかりのシオン用のドレスであった。

「父様、私はドレスよりも兄様のような服がいいです。動きづらいですし。」

「そんなっ・・・！シオンはこんなに可愛らしい女の子なのに！」

すっかりスカートが苦手となっていたシオンはイヤイヤと首を振る。シオンが今着ているのはリオルの服。

しかし八歳のリオルの服はまだ四歳のシオンには大きすぎてだぼっとしていて、袖やズボンの裾は何度も折り返されていた。

「いや確かにそういう格好でも可愛いことに間違いはないのだが・・・」

「いいじゃないですか。シオンの好きにさせてあげましょう」

シオンへの助け舟を出したのは傍らで微笑みながら様子を眺めていたイシェカだった。

しかしアロルドは、「可愛いが、可愛いのだが・・・」と親バカな言葉を連呼しつつも納得する様子もない。

「シオンは活発な子ですからね。また前のように怪我をしても困りますし・・・」

「そうですね。どんな格好でもシオンはシオンですよ父様」

「ううむ・・・」

イエシカの言う前のような怪我、とはシオンが塔から落ちた時のこ

とだ。

アロルド達はシオンが雷に驚いてドレスの裾を踏み、バランスを崩して落ちてしまったと思っている。

納得がいかない様子のアロルドを無視してイエシカはシオンへと向き直り微笑む。

「よかったわね、シオン」

「はい、母様」

「まてっ、まだ了承したわけでは・・・」

「あら、だめなんですの？」

慌てるアロルドにいつもと変わらぬ微笑を浮かべイエシカが問う。
シオンもリオルもこういうときに父が母に勝てないのを知っていたので、顔を見合わせてくすりと笑いあう。

「しかたあるまい・・・」

二人の予想通り、アロルドはしぶしぶ了承したのだった。

その日の午後にはシオン用に新しい服が何点も用意されていた。

そして街では楽しそうに洋服店を訪れるファシル婦人を見た人がいたとかいないとか。

08 次男

シオンは十四歳となり、ファシル家次男として立派に成長していた。

「なあ・・・あの子はいつ娘に戻るのだ・・・？」

「さあ？好きな殿方でもできれば戻るのではないですか？」

そんなシオンを両親と兄は暖かく見守っていた。

何故シオンがファシル家次男として生活しているのか。
その理由は簡単なものだった。

まずファシル家婦人であるイエシカが男の子の服を買いに行った際に、男の子がお生まれになったのではと噂が立った。

その噂はアロルドの親友でもあるセルジオ王の耳にも届き、アロルドは王城へと呼び出しを受けた。

『次男が生まれたのであれば何故教えなかったのだ、水臭いやつめ』

そんな書状が届き、書状には城へ来るようにとも付け加えられていた。

呼び出しは王命であるので仕方なくアロルドが王へ事態の説明をしたのだったが・・・

「ぷっ・・・くくっ・・・なるほどな。面白いじゃないか、シオンを次男として認めてやろう。娘のほうは病気で療養に出ていること

でいいな。逆に次男は療養の甲斐があり健康になって帰ってきたということでいいだろ」

「セルジオ！お前またそんないい加減なことを！少しは王らしくだな・・・」

「ふん、お前の息子も少々体が弱いところもあるのだから平気だろ。それに俺が許可したんだから問題ない」

「問題ありすぎだ！人の悩みを面白がりやがって・・・このお祭り男が」

「いいか？これは王命だ。シオンが自分で娘に戻るまで息子として育てろ」

「くっ・・・このアフォ王が・・・ッ！」

「ふっ、褒め言葉として受け取っておくぞ」

こうしてセルジオ王の気まぐれによりシオンはファシル家次男となり、アロルドはがっくりを肩を落として帰宅したのだった。

シオンにしばらく次男として生活するようにとの話があったと伝えるところ、

「いい王様だね」

面白そうだからという理由で命令されたとは知らないシオンは寛大な王に感謝していた。

そんなシオンにさらに頭を抱えるアロルドであった。

ある日の昼下がり、シオンはリオルと中庭でお茶を楽しんでいた。

「兄様、準備は終わった？」

「もちろんだよ、シオン」

「兄様がいなくなると寂しいな」

テーブルに突っ伏してシオンがぼつり、とつぶやく。

「いなくなるっていつでも学園の寮に入るだけだし、休みの日には戻ってくるよ」

「それはそうなんだけど・・・」

リオルから視線をずらし、シオンはふと離れて暮らしていた懐かしい祖母を思う。

藤崎家は皆、紫苑を家族として接してくれていたがやはり祖母のことは気がかりで寂しくも思っていた。

祖母もいつも紫苑を気にかけてくれていたが、そんなやさしい祖母に何も言えずに別る事になってしまった。

思い出すとチクリ、とシオンの胸が痛む。

そんなシオンにリオルは微笑みかける。

「父様と母様を頼んだよ」

「はい・・・」

爵位を持つ家では息子を一人、王立騎士学校または王立魔術学校に通わせなくてはならない。

息子がいなければその限りではないが、ファシール家も例外でなくリオルが魔術学校へ入学する事になっていた。

アヴァロン王立魔術学校。

それは多くの魔術師を輩出するアヴァロンでもトップレベルの実力者のみが通うことのできる学校。

ファシール家は魔術の名門であり、アロルドも魔術学校を卒業して

おり、リオルもとても優秀で有望な魔術師だった。

（学校かぁ・・・懐かしいな。せめて高校ぐらいは卒業したかったな）

そこでふとシオンは気づく。

学校の入学資格は年齢制限のみで、十四歳から二十歳までの間となっている。

シオンは十四歳なので受験資格を満たしており、試験に合格しさえすれば入学できる。

「そっか、私も来年受験すればいいんだ」

「そうだな。シオンならきっと大丈夫だよ」

「うん、もっと剣の練習しておかなきゃ」

「えっ、騎士学校を受けるのかい？」

「そのつもりだけど？」

シオンもファシル家の一員らしく魔力はあったがあまり魔法は得意ではなかった。

その日の午前中にもコントロールに失敗し、大量の池の水をアロルドとリオルに浴びせてしまったのだ。

どちらかというと体を動かすことの方が得意で剣の訓練の方が得意だった。

「そうか・・・まあ騎士学校でも・・・ごほっ」

「・・・兄様？」

咳き込んだリオルをシオンは覗き込んではっとする。

昔から兄は体が少し弱いところがあった。

シオンが昔池に落ちた時、助けようと池に飛び込んだ兄がその夜に

熱を出したことは今でも覚えている。

そして今日もやはり兄は池の水を大量に浴びていた。

「まさか・・・」

リオルの額に手を触れればほんのりと暖かい。

「兄様熱がある！今日はもう休んだほうがいい！」

叫ぶと同時にシオンは立ち上がりがばっとリオルを抱き上げる。

シオンにお姫様抱っこされる形となったリオル。

「ちよっ、シオン！俺は大丈夫だから・・・！それよりなんでこんな力がっ！」

慌ててリオルが降りようとするが、シオンはがっしりとリオルを抱きかかえたまま小走りで部屋へと向かう。

いくら男の格好をしているとはいえ十四歳の少女であるシオンが、細身ではあるが十八歳のリオルを抱きかかえるのは普通では考えられないことであつた。

「さあ兄様、ゆっくりと休んでくださいね。また様子を見にきますから」

「・・・ああ。ありがとう」

リオルをベットに寝かせるとシオンは満足そうに部屋を後にした。残されたリオルは小さくため息をつく。

先ほどのシオンに魔法を使った様子はなく、おそらく火事場のバカ力というものだろう。

どうやらシオンはリオルが思っていたよりもずっと遅しく次男として成長しているようだ。

リオルはシオンが喜ぶのなら、と男の子のような服装を了承した事を今更ながらに後悔した。

弟でも可愛いのだがやっぱり妹に戻って欲しいと切に願うリオルだった。

09 代役

リオルが王立魔術学校へ入学する日の朝のファシル家は慌しかった。

「リオルはどうしたんだ？」

アロルドは焦りを隠せずにウロウロと部屋の中を歩き回っている。そんな夫をイエシカはいつもの笑みを絶やすことなく、のんびりとお茶を飲みつつ眺めていた。

しばらくすると、バタバタと走る足音と共にシオンが激しく扉を開き、部屋へと飛びこんできた。

「どうしよう・・・揺すっても叩いても兄様目を覚まさない・・・！」

「・・・困ったわねえ」

青ざめているシオンとは対照的に、さほど困ったような様子には見えないイエシカがつぶやく。

リオルは微熱以外にどこか異常がみられるわけではなく、ただただ眠り続けていた。

「今年入学すると手続きを済ませてしまっているからな。公爵家が入学初日から不在なのはさすがにまずい」

「原因がわからないのですから、いつ目が覚めるかわかりませんもの。入学式どころかその後通えるかどうかすら怪しいのでは？」

「う・・・うむ」

それは世間体という問題にすぎないのだが、公爵家ともなると重要な問題となる。

国でも重要な機関である学校の入学式には王族も出席する一大イベントでもある。

今年は騎士学校に王子が入学する年とあって、魔術学校も入学式は普段より盛大に行われるらしいともつばらの噂だった。

平和な国家であつても貴族同士のいざこざはある。

有数の権力を持つ公爵家を蹴落とそうとする者も少なからず存在する。

そして一番の問題は、家位も実力もあつたりオルは入学試験を受けていないということだった。

形式上、無試験での入学は王の許可を得てという形になっている。

許可を受けて入学しないとすると、王の意向に背く行為だと言われもおかしくはない。

「兄様はいつ目が覚めるかわからないんだよね・・・」

「そうね、悪いものは感じないから心配は要らないと思うけれど、いつ目が覚めるかはわからないわ」

「入学しないとまずいんだよね？」

「ああ、立場上まずいが・・・シオン、お前まさか・・・」

はっとしてアロルドが顔を上げると、意を決したようにシオンも顔をあげた。

「私が兄様の代わりに入学します」

シオンの顔は真剣そのもので、冗談を言っている様子は微塵もない。

「兄様は少々病弱だと知られているのですから私が入学しても不思議

議はないでしょう？」

「そうねえ、そもそも去年も風邪をこじらせて療養していて入学を見送ったのよね」

「いや、しかしだな・・・」

「都合のよいことに私はこの家の次男です」

「だが魔法は・・・」

「あら、シオンはコントロールが苦手なだけで魔力量だけならば十分ですわ」

「そうですね、コントロールは苦手ですが学校なのだからそれを学ぶいい機会かもしれません」

アロルドは悟った。ここに自分の味方はいない、と。

妻は面白がっているような節もあるが、自分の子供に不利益なことをさせるような人間ではない。

悲しくも、今のシオンは身長は平均よりも低いがどう見ても綺麗な少年としか見えなかった。

どちらにせよ息子を入学させなければならない状況に変わりはないので、シオンが入学するしかない。

学校に通うのは三年間。

卒業時のシオンは十七歳なので、今のように男として誤魔化せるかどうか。

不安が尽きることはないが、アロルドは知っていた。

シオンが無意識に丁寧語で話す時はかなり興奮しているときである事を。

そんなシオンを止める事ができるのは、今は眠り姫状態のリオルだけ。

下手に刺激すると更なる事態の悪化を招きかねない。

アロルドは大きく息をつき、両手を上げて降参のポーズを取る。

「わかった。ただし何か問題があればすぐに呼び戻すからな。すべての処理はセルジオにさせてやる・・・」

「ですって。王様にご迷惑をかけてしまわないように気をつけてね」

「・・・はい」

「それじゃ急いで支度しましょう」

時間は刻々と迫っており、すぐにでも家をでなくてはいけない時間となっていた。

制服はリオルのものなのでサイズは合わなかったがそれを着込み、リオルの用意していた荷物の中の服を自分のものと入れ替え簡単に準備を済ませる。

「シオン、もう出るぞ」

「はい、すぐいきます」

扉をノックする音に続き、アロルドが声をかける。

シオンはぐるり、と自分の部屋を見渡し深呼吸する。

隣のリオルの部屋を覗いてみたが、やはりまだリオルは眠ったままだった。

「兄様いつてきます」

極力静かに扉を閉め、シオンは屋敷を出た。

10 入学

魔術学校は城下町にある。

シオンとアロルドを乗せた馬車は城下町への道を急いでいた。

アロルドはしきりにため息をつき、シオンは決意に燃えていた。

シオンには自分が大それた事をしようとしているという自覚はなく、ただ家族を守れるのは自分だけなのだという使命感があるだけだった。

入学式の時間ギリギリではあったがなんとか間に合い、手続きを済ませる。

手続きといっても特待生のような扱いのシオンは、前もって交付されている証書と身分の証明だけという簡単なものであった。

その際アロルドがおそらく学園長と思われる人と言葉を交わしていたが、話は程なく終わりアロルドは来賓の席へと案内されることになった。

（アレ以来ほとんどパーティーにも出たことないし、あまり実感なかったけれど・・・やっぱり公爵家、なんだなあ）

他の入学生家族とは別の場所に案内される父を見て、今更ながらに実感する。

「シオン君？」

名を呼ばれ振り返ると、そこには同じ制服だがタイの色が違う青年

がいた。

急だった為ちらりとしか見ていないが、資料に学年ごとにタイの色が違うと書いてあった事を思い出す。

「はじめまして。俺は三回生のディアンⅡフィリオム。寮まで案内するからついてきて」

「あ、はじめまして。シオンⅡファシールです。よろしくお願いします」

シオンが慌てて挨拶を返すと、ディアンは少し思案するようなそぶりを見せた。

「ファシール・・・？ファシール公爵家の？」

「はい・・・そうですがそれが何か？」

「あ、リオルとは友人でね。彼が来るものだと思っていたから。ごめん、失礼だったね」

「いえ、今朝まではその予定でしたから」

「え・・・？」

気さくな様子で先輩風を吹かせない爽やかな人。

それがシオンのディアンに対する印象だった。

そんな爽やかなディアンが少々複雑な表情でシオンの目の前で固まっている。

「兄はちょっと体調を崩して・・・」

「あー・・・、彼は体が弱いんだったね」

「はい」

ディアンはシオンを見てにっこりと微笑む。

「うん、君ならきつと大丈夫。困ったことがあったら俺に言って」
「ありがとうございます」

そう言ってディアンは再び歩き出した。
程なく寮へ到着し、シオンが使う部屋へと案内される。

「あの、部屋は二人部屋だと聞いていたのですが」

「基本はそうなんだけどね、リオルは体が弱いと聞いていたから学校側が配慮したみたいだね」

「そうなんですか」

部屋には二段ベットに机が2つ。他には小さなクローゼットが2つあるだけの質素なものだった。

公爵家であっても特別扱いではないようで、本来紫苑が小市民であった過去のせいか、なんとなく落ち着く広さだ。

「狭くて窮屈に感じるかもしれないけど・・・」

「いえ、逆に落ち着きます」

「そうかい？ ああ、そろそろ式の時間だな。急ごう」

「はい」

シオンは荷物を部屋に置き、ディアンから鍵を受け取り施錠して部屋を出た。

ディアンに案内されて到着した会場はとても大きな講堂だった。
ちらほらと警備らしき人も目に付く。

「警備が多いですね・・・」

「そうだね、今年は特別だよ。式典を王様が見学されるらしい」

「なるほど」

それじゃあ俺は別の仕事があるから、とディアンはその場を後にする。

シオンは礼を言い新入生の集められている場所へ向かった。

新入生はざっと見て三十名といったところだった。

先生らしい人に連れられ、待機している列の中へと並んだ。

周りの新入生の多くがソワソワとしているのがわかる。

王が来るということは国でもトップの白銀の騎士と魔術師の両名が来るだろう。

それはこの国の騎士と魔術師が目標とする存在であり、シオンも例外ではない。

シオンは何度か王には会ったことはあるが、白銀の騎士と魔術師に会ったことはなかった。

今日はおそらくその姿を見ることができようだろう。

シオンは落ち着かない気持ちを抑えながら、式の開始を待った。

そんなシオンを見つめている人物がいた。

普段のシオンであれば気づいていたはずなのだが、ソワソワと落ち着きがなかった為全く気づいていなかったのである。

すぐにシオンを見つめていた視線ははずされ、そのままシオンが視線の主に気づくことはなかった。

11 同志

壇上で祝辞を述べるセルジオ王は威厳に満ちていた。

しかしその言葉は堅苦しいだけののではなく、聴く者を魅了する。ただ一人、アロルドを除いてではあったが。

（あのアフォ王め・・・普段なら祝辞どころか参加すら渋っているくせに今回はやたらご機嫌だな）

決して人様に聞かせることのできない台詞を心の中で毒づく。

そう、セルジオ王はうまく隠してはいたが、その心中はともにご機嫌な状態であった。

そして祝辞を述べ終わった王は満足そうに、その場を後にする。

そのまま式典はつつがなく終了し、新入生はその場に残され今後の予定の説明を受けた。

その後騎士クラスと魔術師クラスとに別れ、さらに詳しい説明を受ける為校舎へと移動することとなった。

（魔術師クラスは十人か・・・）

魔術師クラスはそれなりの魔力を有していないと入ることができない。

そして魔力は生まれ持つ才能であって、その魔力量は本人の努力でどうにかなるというものでもない。

才能だけでなく本人の努力も重要な騎士クラスに比べれば人数が少ないのは当然ともいえるだろう。

（できるものなら騎士（あっち）のクラスに移動したいものだけど・・・無理かなあ）

シオンはそんなことをぼんやりと思いつつ、魔術師クラスの校舎へと誘導されていった。

「それでは担当の教官が来るまでしばらく待っていてください」

新入生を教室まで案内してきた上級生は、そう言って教室を後にした。

改めて教室を見渡せば、ふと視界に懐かしい色が映る。

（涅槃色（くりいろ）の髪・・・）

それは昔、祖母が教えてくれた色だった。

大好きだった幼馴染の髪と瞳の色。その本人は好きではなかったようだけれど。

染めている人とは違うその色がシオンは好きだった。

なんとなく自分の前髪をつまんで眺めていると、ぽんぽんと肩を叩かれた。

「ん、何？」

振り返れば、そこにいたのは人懐こそうな笑顔の赤毛の青年。

「はじめまして。俺はランスロットっていうんだ。君は？」

「シオンです」

「これからよろしくな、シオン」

「こちらこそよろしく、ランスロットさん」

「ランスでいいよ。同期なんだし、さんづけされるのも慣れてない

からなあ」

「・・・わかった。よろしく、ランス」

握手を求めて差し出されたランスの手を握ると、その手は少しゴツゴツしていて魔術師の手というには違和感があった。

シオンはランスの手首をひよいと掴んで手のひらを返して眺める。そこにあつたのは明らかに剣ダコであつた。

「・・・これって剣を握っている手だよね」

「どちらかという騎士志望だったりする。でも家の都合でこっちのクラスなんだ」

ひらひらと手をふりランスは答える。

「同志・・・！」

「シオン、お前細っこいのに騎士志望なのか・・・」

がつつりと組みなおされた手をながめつつ、ランスがつぶやく。

「魔法騎士とか」

「俺も人のこといえた義理じゃないけど・・・器用貧乏にならないようにな」

魔術を使うには集中が必要で、剣などで戦いながらその集中を保つことは至難の技である。

相当な魔術の熟練が必要となり、そこまでの力をつける者が同時に剣技を磨くことはあまりない。

さらに魔術を極めようとはしても、同時に剣技を磨こうという物好きはほぼ皆無だ。

「でもそれがロマンってやつだから」
「まあ夢を持つことは自由だな」

そして教官が教室へと入ってきたので話はそこで中断し、二人はあわてて前を向き姿勢を正した。

学園最初の講義は自己紹介から始まった。

このあたりはどの世界でもあまり変わらないようだ。
シオンは少しの期待を胸に、自己紹介をしていくクラスメイトたちを見る。

一人、自己紹介をしたときにやたら周りがざわついた生徒がいたが、興味がなかったので気に留めなかった。

(それよりも彼・・・)

視線の先には先ほど見つけた懐かしい色。

彼が座っているのはシオンより前の席なのでその顔や表情を窺い知ることはできていない。

(まさか・・・ね)

少しとはいえ期待してしまうのは仕方のないことだとシオンは思う。
それは期待というよりは願望に近かった。

そして自己紹介は彼の順番となり、彼は席を立ち前へと歩み出た。

12 朝食

学園生活五日目。

シオンは何の問題もなく学園生活を送っていた。

（紫苑の時から自覚はあったけど・・・）

シオンは自室の鏡に映った己の姿をまじまじと眺める。

男装をしているといっても男物の服を着ている以外は、一人称を俺にしたというだけだというのに。

悲しいことにサラシを巻いたりとした努力もしていない。さすがに多少厚手のベストは着込んでいるが。

一度たりとも性別を疑われたこともなく、女っぽいなどということ言われたことすらない。

（何もしなくとも男に見えるってどうなんだ・・・絶壁か！絶壁だということかッ！？）

それはもう清々しいとまでいえるほどに、幼少時から男だと間違われつつけていた。

小学生になる頃には、すでに性別を訂正する気さえ起きなくなっていた。

そういえばラブレターももらったな、と思い出す。もちろん女の子からだった。

そしていつも隣には自分よりずっと大量のラブレターをもらっていた幼馴染がいた。

ふと幼馴染と同じ色をもつクラスメイトが脳裏をかすめる。

色だけでなく容姿もそっくりだったのだが、名前と顔つきが違って

いた。

さすがにファミリーネームは違ったが、紫苑はシオンと同じ響きの名前、容姿は紫苑と寸分の違いもない。

もしかしたら幼馴染もこの世界に転生しているのかと都合のよい事を考えなかったといえは嘘になる。それほどに容姿はそっくりだった。

シオンにもさすがにそれは都合のよすぎる妄想だという自覚があったのでその考えを振り払う。

（ユージン＝フィッツジェラルド、か）

自己紹介の為に壇上へと歩み出たユージンは、幼馴染のふんわりとした笑顔とは対照的に、意志の強そうな視線が印象的で少々きつそうなイメージさえ受けた。

確か家が有名な騎士の家系で、彼はその家の長男なのだとランスが言っていた気がする。

騎士の家系なのに魔術師クラスにいる理由はわからないが、その体つきから相当鍛えているということも窺い知れた。

幼馴染ではないにしろ、騎士志望なシオンは一度彼と話をしてみたと思う。

主にどうすればあんな引き締まった体になるのかについてなど。

筋肉がつきにくい体質のシオンからするとوراやましい限りだった。

ドンドンとドアを叩く音で我に返る。

「おいシオン、早くしないと飯食いっぱぐれるぞー」

「悪い、すぐ行く!」

呼びにきたのはすっかり仲のよい友人となったランスだ。

時計を見れば、すでに朝食の開始時間を少し過ぎたところだった。

騎士クラスの生徒たちはよく食べる。朝食の開始時間から終了の間まで食べ続けるような生徒も多数いる。魔術師クラスは食が細い生徒が多くさっさと食べて終わるのだが。

魔術師クラスに比べ約二倍の人数の生徒が騎士クラスにいて、それがシオンたち一年だけでなく三年生までいるのだ。

いくら用意される食事の量に余裕があっても、席数に余裕がなければ食いつぶれる生徒がでてくるからだ。

そのため魔術師クラスの生徒は騎士クラスの生徒より先に食事を済ませるという暗黙の了解があった。

「悪い・・・俺が遅かったから」

「ん、いいって。俺も好きで待ってたんだしな。でもさすがにのんびり待っていると遅刻しちゃうし、どっか相席でも頼んでみるか」

「うん・・・」

食堂はすでに生徒で溢れていて空いている席が見当たらなかった。

シオンは自分は自業自得なので仕方がないが、ランスが自分につき合って遅刻してしまうのには気が引ける。

シオンが相席のお願いができる相手がいないかと視線を彷徨わせていると、後ろから声をかけられた。

「お困りなら僕たちのところに一緒にしませんか？」

願ってもいない提案にシオンがぱっと振り返ると、そこには金髪碧眼の可愛らしい生き物がいた。

日本の平均的な女性の身長よりすこし高いぐらいのシオンより十センチほど低い。

ふわふわの金髪に大きくぱっちりとした碧い瞳。

騎士クラスの制服を着てはいるが、その容姿はどう見ても・・・

「女の子・・・？」

「貴様の目は節穴ですね、コンチクショウ」

ぽつり、と呟いたランスの頭を、可愛らしい生き物が片手で床に押し付けていた。

「ランス、彼は立派な男性だよ。そもそもこの学園に女の子がいるわけないだろう」

「・・・スミマセン」

「わかっていただければいいんです。ではこちらへどうぞ。お二人とも席がないのでしょうか？」

「助かります」

シオンは自分の事は棚に上げランスを諭す。

それを満足そうに頷いていた可愛らしい生き物の彼、エミリオに案内されて彼の席へと向かう。

そこにはエミリオの連れの姿があり、それはシオンたちも知っている人物だった。

13 友人

「えっと、おはよう。ユージン君」

「おはよう。名前は呼び捨てでかまわない。こちらもそうさせてもらう」

「わかった、同席させてくれてありがとう。エミリオ、ユージン」

シオンはエミリオの連れがユージンだった事には驚いたが、それよりも目先の問題である朝食を済ませることにした。

この食堂はカウンターでその日のメニューから好きなものを好きなだけ自分で注文して受け取り、自分で席まで運ぶというセルフサービス形式だ。もちろん食べ終えた後の食器も自分で返却口へと返す決まりである。

シオンとランスが食事を手に戻ったときにはユージンとエミリオはすでに食事のほとんどを終えていたが、そのままその場に留まり会話を楽しんでいるようだった。

「僕はユージン様の家に仕える使用人の息子なんですよー」

「へえ、色々大変なんじゃないか？」

「いえいえ、ご当主様もユージン様もみんなよくしてくださっていい……」

さっさと朝食を終えたランスはエミリオと世間話で盛り上がっている。

シオンはユージンの視線を感じつつも黙々と朝食を食べ続けた。

「シオンの食べる量が気になるのか？」

「……よく入るな」

「俺も最初は驚いたもんだよ。こんなに細っこいクセに二・三人前

は軽く食べちまうからなあ」

それまでエミリオと会話していたランスがユージンの視線に気づき、話しかける。

「コレぐらい普通だよ」

ちらりと視線だけ上げて講義するシオンに、三人は揃って視線を逸らせた。

シオンはそんな三人の態度に納得のいかないものがあつたが、今は目の前の朝食に集中する。すでに時間は迫っていたのだから。

「クラスのヤツラがひどいんですよ。お前女じゃないかって僕の服をひっぱったり！」

「それは大変だな」

「ええ！まあそんなことしてきたヤツラは全員沈めてやりましたけど！！！」

「本当に沈めてたな」

「そういえば騎士クラスの生徒の何人かが池に落ちたとかいう噂があつたけど・・・」

「事実ですね」

女に間違われる男というのも大変そうだなと妙な親近感を覚えつつ、そんな様子は見せずにシオンは朝食を食べ続ける。

確かにエミリオはとても可愛らしいので皆がちよっかいをかけたくなるのも仕方がないのかもしれない。

しかし先ほどランスを押し倒した(?)ことからその実力が高いことは間違いないだろう。

それほど筋肉がない自分も騎士を目指せるんじゃないか、と淡い希望を抱いたシオンだった。

「さて、もう時間だな。戻るぞ、エミリオ」

「あ、はい。それでは失礼しますね」

「またな」

「・・・（ごっくん）二人とも、席ありがとう」

ランスが軽く手を上げて二人を見送り、未だ食べ続けていたシオンは慌てて食べていたものを喉の奥へと押し込んで二人へと声をかける。

すでにシオンの胃袋には三人分の量の朝食が詰め込まれていた。

「ほら、俺たちもそろそろ戻らないと」

「（もぐもぐ）もうちょっと食べたかったんだけど・・・しかたないか」

「もう十分だろ・・・」

「ん、足りない分はお昼に食べる」

何故かがつくりと肩を落とし溜息をつく友人を尻目に、シオンは食器を片付けるために立ち上がった。

その以来、ユージンとエミリオとは一緒に食事をとったり、会話を交わしたりとランスほどではないが仲のよい友人となった。

エミリオは騎士クラスなので食事以外ではなかなか会う機会はなかったが、同じ魔術師クラスであるユージンとは会話をする機会も多くなった。

「ユージンの家って騎士の家系なんだっけ」

「そうだ」

「エミリオはお父さんがユージンの家で執事をしているんだっけ」

「ああ」

「なんでユージンは魔術師クラスでエミリオは騎士クラス？」

今は昼の休憩時間でシオンとユージンの二人で学園の中庭にあるテラスでお茶を飲んでいた。

ランスは用事があるとかで先生に呼び出されていてこの場にはおらず、エミリオは騎士クラスの外実習でやはりこの場にはいなかった。シオンの問いにユージンは読んでいた本をぱたんと閉じてシオンに視線を移す。

「あいつは俺が学園に入学するのなら自分も入学するといって一般で受験した。子供の頃から俺と一緒に鍛錬は積んでいたから問題なく合格したみたいだな」

「へえ、すごいなあエミリオ」

「俺は魔力があったから魔術師クラスを選んだだけだ。騎士の鍛錬なら家でも十分できるし師もいるからな」

「つまりユージンってちょーえりーとさんなんだね・・・」

「人より努力した結果だ」

ちらりとユージンが手にする本を見れば、それは中級の魔道書。それはユージンが日々努力しているのが本当だと物語る物だ。

「俺は魔術の知識だけなら詰め込んでいるけど・・・実技はさっぱりダメだしなあ」

「実技は実践して覚えるしかないだろうな」

「やっぱり騎士クラスに入りたかった・・・体を動かす鍛錬のほうがいいんだよね」

シオンが騎士クラスに入らなかった理由。

それはファシル公爵家が魔術の名門だからだという理由ではない。

実際体面だけならばこの学園に入学することが重要であって、どちらのクラスに入ったかなどはさほど重要ではない。

確かにその後のことを考えるならばそれなりに重要であろうが、人とのつながりのコネなどもファシル公爵家には必要でない。むしろそのつながりを欲しがられるほうの立場だ。

ならば何故シオンは魔術師クラスに入ったのか。

理由は単純。

さらなる娘の息子化を防ぐために、アロルドが泣いて頼んだからである。

しかしその娘の口調が中性的なものから男性寄りになってきている事実にはまだ気づいていない。

14 属性

午後の講義は初めての魔法の実技だった。

初めて訪れた訓練所は大きな円形の建物で、外に魔法の威力が及ばないように結界が張り巡らされている。

広い訓練所の中心にはテーブルがあり、そこには大ぶりの水晶が置かれていた。

「本日はそれぞれの得意な属性と魔力量を確認したいと思います」

実技担当の講師、ロナルドがおっとり微笑む。

「この水晶に魔力を込めると色が変わります。その色でどの属性と相性がよいか、その濃さで魔力量がわかるという道具です」

ロナルドはそう言い、魔術師には有名な道具である水晶に手をかざす。

ふっとロナルドの纏う空気が変わり、水晶の内側から白と青の煙のようなものが溢れ出す。

その煙は水晶の内側いっぱいに広がり、混ざり合い、水晶をはっきとした水色へと変化させた。

（二属性でしかも魔力も強い・・・）

シオンの実家にもあり見慣れたアイテムではあるが、ロナルドのように濃い水色というのはあまり見たことがない。

それでも父であるアロルドは青一色ではあるが、濃さだけならばロナルド以上であったのでその魔力量にも驚きは少ない。

ちなみに魔力が低い場合は、煙のようなものが少し湧き出るだけで

水晶の内側にひろがるので色が薄くなる。

「それでは順番に前に出て、水晶に魔力を込めてください。それでは君から順番にやっていきましょうか」

ロナルドは横一列に並んだ生徒のうち、一番右端の生徒を指す。
シオンはランスとユージンと共に一番左端に立っていた。

いくら貴族といえど、魔術師クラスには一定以上の魔力持ちでなければ入れないだけあって、水晶は毎回はつきりとした色の変化を見せていた。

三番目の生徒が前に歩み出ると、生徒からざわめきがおきる。
そのざわめきの理由がわからないシオンは肘でランスをつついた。

「どうした？」

「あの人何かあるの？」

「は・・・？シオンお前知らないのか？自己紹介でも言ってたぞ？」
「わからないから聞いてるんだよ」

ヒソヒソと小声でやり取りをする二人をちらりと見て、ユージンは溜息をつく。

「あの方はクリストフⅡウィルⅡアヴァロン。この国の第二王子だ」
ぶっ

「うわっ、きたねーなシオン！」
「こらそこ、仲が良いのはいいいことですが今は講義中ですよ」
「すみません・・・」

噴出したシオンにランスが思わず叫んでしまい、ロナルドにやんわりと注意されてしまった。

ペコリと頭を下げたシオンが視線を戻せば、王子と目が合う。

（王子ってことは、あのセルジオ王の息子ってことだね・・・）

蜂蜜色に碧眼といういかにも王子様な外見。少々目つきがきつい気もするが、紫苑の友人に聞けば全員が王子だと答えるであろう整った容姿だった。

臣とそっくりなユー진은もとより、ランスも明るく爽やかな容姿でシオンからみれば立派な美形だ。本当にこの世界には美形が多いとシオンは思う。

シオンが視線を逸らすことなく王子を観察していると、王子も少し驚いたような様子でシオンを凝視したかと思うと、すぐに視線を水晶へと戻した。

（王と父様が知り合いなのを知っているのかな・・・）

シオンは王子の自己紹介を聞いていなかったのだから知らなかったが、王子はちゃんとシオンの自己紹介を聞いていて父親同士が友人であることを知っていたのだろう。そう自己完結して水晶に集中する。

王子が魔力を込めると、水晶は眩しく光を放った。

「・・・ッ！光属性・・・!?」

突然の強い光に思わず目を閉じる。それでも少し光が目には焼きついて視界を奪われた。

ユージンは最初から知っていたらしく目を伏せてやり過ごしている。

（外見だけじゃなくて属性までもがいかにも王子様だなあ）

シオンは徐々に戻りつつもはっきりしない視界の中でぼんやりとそんなことを考えていた。

同じように視界をやられ、回復してきたらしい生徒たちが歓声を上げている。

「報告にはありましたが・・・想像以上の魔力ですね」

「いえ・・・」

賞賛の声の中、王子は特に感情を表情に出すことなく元の場所へと戻っていった。

「レアな属性みちゃった・・・」

「そうだな」

呆然とシオンが呟けば、やはり呆然とした様子でランスが返す。

この世界の属性は大きく分けて三つの系統に分けられる。

基本属性ともいえる火、水、風、土の四大属性。そしてその上位に位置される光と闇の二大属性。そして属性を持たないがその汎用性の高さから重宝される無属性。

二大属性は本当にレアな属性で、その属性持ちは世界にも数えるほどしか確認されていない。

しかもやっかいなことに二大属性の魔法はその属性持ちでないと扱うことができないのだ。

「シオン、ユージンの番だぞ」

「あ、うん」

ランスの声でシオンが正気に戻った時にはすでにラスト三人であるユージンの順番になっていた。

「緑・・・風属性だな」

「うん、ユージンのイメージにぴったり」

「そうだな」

ユージンが手をかざす水晶は、濁りのないきれいな緑色へと変化していた。

色もなかなか濃く、かなりの魔力を有しているようだ。

（優秀な騎士で才能ある魔術師だなんて、なんて羨ましい・・・）

現時点ではユージンの騎士としての能力は知らなかったが、優秀なのだろうと勝手に想像し、シオンはユージンに少々の嫉妬と羨望の眼差しを向けていた。

そしてランスは想像どおり、水晶をその髪色と同じ赤へと変化させた。

一般からみればかなりの魔力量だったが、魔術師クラスでは低いほうだ。

水晶を見て軽く溜息をつき、ランスが戻ってくる。

「次はシオンだな」

「気が進まないんだけどね」

がんばれよ、とランスに肩を叩かれてシオンは水晶の前へと歩み寄る。

そして気乗りしないまま水晶へと魔力を込めた。

15 中和

あれは五歳の時だった。

簡単な魔法を兄のリオルと共に練習していたのだが、シオンはなかなか上手くできないでいた。

魔法を具現化させるまでは出来るのだがその維持が上手くない。魔力が低すぎて維持できないのかもしれないと、念の為に属性と魔力を調べられる水晶で確認してみようということになったのだ。

まずは兄であるリオルから試すこととなり、シオンはその美しい色の変化に感激した。

水晶の中心から溢れ出したのは暖かな黄色。それは土属性を意味する色だ。

父のアロルドは青の水属性でそれも美しい色だったが、兄の色もそれに負けるとも劣らない美しい色だった。

そして属性は遺伝するものではないらしいということを知ったのだ。

そしてシオンが同じように水晶に手をかざすと・・・

「これは・・・」

目を閉じて集中するシオンにロナルドが驚愕の声をあげる。

「シオン・・・」

「・・・驚いたな」

続けて聞こえるランスの声も驚きで震えていたが、ユージンは驚い

たというわりにはいつも通りの声色だった。そして周囲にはざわめきが起きた。

はあ、とシオンは溜息を漏らす。

次の瞬間にロナルドが慌てた様子で叫んだ。

「ファシール君！魔力を込めるのを止めてください！」

その声にシオンがはっとして目を開けば、水晶は真っ黒に染まりさらに水晶の周りは濃い闇が広がりつつあった。

（やっぱり・・・）

あの時と同じ。

色を変えた水晶はその内から闇を吐き出していた。闇は水晶の内に留まらず外へと溢れ出す。

あの時も同じように闇が溢れ出し、部屋を包み込んだ。部屋から闇が消えるまでには三日もかかったのだった。

今回は学校でしかも魔術師クラスでの出来事なのだから、誰かが方法を知っていて、あの時よりは早く闇が消えるかもしれない。

そんな淡い期待をし、魔力を込めるのを止めても留まることなく水晶から溢れ出す闇に包まれながらシオンはちらりと友人たちを見る。

「シオン・・・！」

「クリス、水晶に魔力を」

どうしていいかわからず焦るランスの隣で、妙に冷静なユージンが誰かに声をかけていた。

すでにほぼ全身が闇に包まれていたシオンにはその誰かがわからなかったが、隣へ来た人物に気づき理解する。

「お前・・・闇属性なんだな」

ぽつり、と呟いたのはあの光の王子様。クリスというのは王子の愛称だったらしい。

ぐい、と王子は水晶にかざしたままになっているシオンの手を掴み引き寄せ、代わりに自分の手をかざす。

王子が魔力を水晶へと魔力を込めると、溢れ出ていた闇があつというまに霧散し水晶は透明へとその色を変化させた。

「な、んで・・・」

「光と闇は対極だからな。四大属性とは違って中和されるらしいな」

驚くシオンに王子は淡々と答える。その口ぶりからは知っていてやったというわけではなさそうだった。

「はあ、予想通りでよかったよ。本当にお前には驚かされるな」

「あ・・・ユージンありがとう。助かったよ」

光と闇が対極なのは当然シオンも知っていたが、中和されることまでは知らなかった。

ユージンも知っていたわけではなく、書物などから得た知識でそう予想したらしい。

そもそも二大属性はあまりにも珍しく特殊な属性であつたので知られていなかったのだろう。

安堵より驚きのほうが大きかったシオンはそこで初めて王子が自分の腕を掴んだままであることに気づく。

「あ・・・りがとうございました・・・」

「いや、気にすることはない」

シオンが自分の腕から王子の顔へと視線を上げお礼を言うと、その視線で腕を掴んだままであることに気づいた王子はシオンの腕を開放した。

「想定外の事態も起こりましたが・・・皆さんの属性と魔力量がおよそ把握できました」

ぱんと手を打ち生徒の注目を集めたロナルドが言葉を続ける。

「今回の測定は各自の属性と魔力量を大まかにですが知ることと、次回からの講義でのペアを決めるためのものでもあります」

生徒たちが己の言葉に注目していることに満足そうに笑みを浮かべてロナルドは続ける。

属性にはそれぞれ相性がある。それは小さな子供でも知っている常識だ。

「基本的には相性のよいとされる組み合わせで実習を行います。これからそのペアを発表します」

属性の相性がよければ結果も出やすい。

苦手な属性を伸ばすためや補うためなどの理由がなければ、相性がよい属性同士のほうがいい。

火と風、水と土の組合せが一般的で闇は比較的水と土との相性がよいとされている。

ちなみに無属性はどの属性ともそれなりの相性である。

シオンは先ほど水晶を青や黄色へと変化させていた生徒を眺め、自分のペアは誰かと推測する。

しかしシオンの推測はことごとくはずれ、目星を付けていた水と土属性の生徒はすべて他の生徒とのペアが発表されていた。

そして残った生徒はシオンとランスとユージンそして王子のみ。

「シオンⅡファシール、クリストフⅡウィルⅡアヴァロンそしてランスロットⅡバートン、ユージンⅡフィッツジェラルド。以上が次回からのペアとなります」

「あの・・・俺の属性と王子の属性は対極では・・・」

そつと手を上げてシオンはロナルドへ疑問を投げかける。

「あなた方は特殊で対極とされていますが、だからといって相性が悪いというわけでもないのですよ」

「そう、ですか・・・」

ロナルドはやはりやんわりとした笑みを湛えながら答えたのだった。

講義はそこで終了となり、残った時間はそれぞれのペアで親睦を深めることとなった。

訓練所の端でシオンたちはいつもの三人に王子という四人で集まっていた。

ランスは壁にもたれかかり、ユージンと王子は姿勢よく立っている。シオンは頭を抱えながらその場にしゃがみ込んでいた。

「まさかペア相手が王子様だなんて・・・」

「俺の名前は王子ではなくてクリストフだ。呼び捨てで構わない」
「そういうわけにも・・・」

あああ、と呻きながらシオンはさらに沈み込む。

「そうだな、せっかくペアなのだからユージンのようにクリスと呼

んでくれ」

「それこそ無・・・」

「それ以外は却下だ。ではよろしくな、シオン」

王子様改めクリスはそう言って王子らしくないニヤリとした笑顔を浮かべたのだった。

16 双子

実技のペアが決まって以来、食事はいつもの四人にクリスも参加するように五人で取るようになった。

「すごいですね、シオンさん。クリストフ王子とペアだなんて」

「すごくないよ。ペアの相手は水か土か、せいぜい無属性の生徒だと思ってたから驚いて・・・食欲落ちちゃうし、困る」

「二人前食ってそれはないだろ・・・」

ちらりとクリスを見てしきりに恐縮するエミリオ。

そんなエミリオの言葉に心底嫌そうに答えたシオンに間髪をいれずそれにつっこむランス。

ペアなのだからと敬語や丁寧語も禁止され、シオンは萎縮気味だ。

その本人は食欲が落ちたと言っているが、それでも騎士クラスの生徒の二倍は食べていた。

クリスはそんなシオンの様子を気にする様子は全くなく、上品に食事を取っている。

ユー진은クリスの向かい側で、すでに食事を終え三人のやり取りを眺めていた。

「ところでシオン。お前に聞きたいことがあるんだが」

「ん、何？」

食事を終え、食器を返却し席へと戻ったクリスが遠慮がちに口を開いた。ちなみにシオンはまだ食事中である。

「お前、双子だというのは本当か？」

ぶほ。

「ちょっ！きたねえっ！」

シオンの咀嚼していた物が向かい側に座っていたランスへ飛び、悲鳴が上がった。

シオンは動悸を抑えながらなんとか平静を保つ。

（大丈夫、ばれた訳じゃない、ハズ・・・）

「ごめんごめん。そうだよ、俺には双子の妹がいる。体が弱くて療養の為に別の場所で暮らしてるから、あまり会ったことはないけど」汚れた口元をナプキンで拭き、平静を装って答える。

「双子か・・・似ているのか？」

その言葉はそれまで傍観していたユージンのものだった。

「似てる、らしい。最後に会ったのはもう何年も前だからよくわからないけど。なんで？」

「病弱ならそうでもないんだろうが・・・女でシオンと同量食べるのか気になっただけだ」

「ああ、確かにそれは気になるな。シオンの妹なら病弱でも食うかも」

「似ているならさぞかし可愛らしい方なんでしょうね」

隠しているわけではないが、シオンにとってはあまり触れて欲しくない話題だ。

そしてユージンとランスの感想が微妙に失礼なもので、エミリオは

本人と同様にその感想も可愛らしいものだった。

「父上にペアの相手を聞かれ、答えた時にシオンが双子だと聞いたんだ。父親同士が友人だから知っていたんだろう」

クリスがまじまじとシオンの顔を見つめながら頷く。

シオンが思わず視線を逸らすと、その先にいたランスがぼんとシオンの肩を叩いた。

「そうなのか、そのわりにシオンはクリスのこと知らなかったよな？」

「王子（オトコ）に興味はなかったし・・・」

「まあ普通はそうだろうが・・・論点が微妙に違ってる気がするぞ」

ランスは「俺は同性同士の愛情も否定しないぞ？」と必要の無いフオローを入れてシオンを微妙に凹ませた。

そこで時間となり、シオンの双子の妹についての話題はそこで一旦終了し、シオンはほっと胸をなでおろした。

その日の講義は魔術師クラスには数少ない武術の講義で、外の騎士クラスの演習場の一部を借りて行われる。

ちょうど演習場を使っていたのは一回生の騎士クラスの生徒たちのようだった。

シオンのように家の都合で入学したのであろう、お世辞にも逞しいとはいえない体つきの生徒もちらほら見える。

すでに彼らは準備運動を終え、模擬剣で打ち合いをしている。

「すげーな・・・」

ぽつりと呟くランスの視線の先には、他の生徒とたちとは違い激しく打ち合う三人の生徒がいた。

その中で一際目立っていたのは他の二人より頭二つ分以上背の低いエミリオだ。

二人を同時に相手をしているにもかかわらず、素人目に見ても明らかにエミリオが優勢だった。

「うわぁ・・・やっぱりエミリオはすごいな」

「・・・そうだな」

少々興奮気味なシオンの言葉に、ユージンは何とでもない事のように返事をする。

ユージンとエミリオは幼少の頃から一緒に鍛錬をしてきたというから大して驚きもないのだろう。

それに比べ、強いのだろうと推測していてもはっきりと知っていたわけではなかったシオンたちは驚きを隠せない。

「ユージン様、皆さん、今日はこちらで演習ですか？」

シオンたちが振り返れば、ぱたぱたと駆け寄るエミリオ。

全く息の乱れもなく、今まで激しい演習をしていた様子は感じさせない。

一緒に演習していた二人の生徒はその場座り込み荒い息を整えていた。

（やっぱり騎士クラスはすごい・・・）

自分に魔術師の素質はないと思っているシオンは本気でエミリオに憧れを抱いていた。

「ああ、今日はここで武術の講義を受けることになっている」

「そうそう、なんか講師の都合が合わなかったとかで今回が初めての武術の講義なんだ」

「そうなんですか・・・ああ、確か魔術師クラスを担当しているのはハワード教官でしたね。あの教官は色々濃いですからがんばってくださいね」

「濃い・・・？」

「あ、それじゃあ僕は戻りますね。あまり話しているとサボってるって怒られちゃいますし。それではみなさん、また昼食で」

手を振りながら、ぱたぱたと走って戻って行くエミリオをシオンは羨望の眼差しで見送る。

ユージンは呆れたようにため息をつきながら、軽く手を上げてエミリオを見送った。

ランスは「あの強さは反則だよなあ」と呟きながら天を仰ぐ。

「ふむ、さすがフィッツジェラルドの関係者だな」と納得したように呟くクリス。

彼らがエミリオが「鬼神」と呼ばれている騎士クラスで特別な存在だと気づくのはもう少し先の話。

そしてエミリオが戻ってすぐ、魔術師クラスを担当する講師がやってきた。

「すまんすまん！ちよつとヤボ用で遅れてしまった」と謝りつつも豪快に笑って。

程よく筋肉がつき引き締まっていたいかにも騎士という体格にそれなりに整った容姿で、黙っていればそれなりにモテるんだろうと魔術師クラスの誰もが思った。

しかしハワードという講師はその見た目の良さを相殺するほど、喋るとオッサンくさかった。

17 演習

『魔術師にも基礎体力や多少の武術の心得は必要である』

それが魔術クラスの武術講師ハワードの信条だ。

そしてその信条は講義にもしっかりと反映されていた。

「本日は基礎体力向上の為の訓練を行う。内容は、軽くヘルゼの丘までの往復を走りこみを行う」

ざわり

一部の生徒からどよめきが起こる。

ヘルゼの丘までは徒歩ならば普通は往復するのに一日はかかる場所にあるからだ。

走りこみで往復するのに軽く、といえる距離ではない。

「もちろん魔法の仕様は禁止だ。己の足でしっかりと走るように。では出発！」

そう言うなり、ハワードはさっさと走り出した。その速度は速い。

そもそもハワードは魔術クラスの武術を担当する講師だが、本来は騎士クラスを指導している教官でもある。そして本人は魔術師ではなく騎士なので基礎体力は高く、一般の魔術師クラスの生徒とは比べ物にならない。

その姿はあっという間に見えなくなってしまった。

「うーん、とりあえず俺たちも出発しようか」

「そうだな」

遅れてたいした説明もなくあつという間にいなくなってしまった講師にしばし呆然としつつも、気を取り直して走り出す。

走り出してしばらくすると、徐々に四人の間に距離が開き始めた。前方を走るのはユージンとクリス。後方を走るのはシオンとランスだ。

後方とはいえ、シオンとランスは他の六人いる魔術師クラスの生徒よりもかなり前を走っている。ユージンとクリスが異常に早いのだ。

「あいつら・・・魔術師の体力じゃねーよな・・・」

「ユージンはどちらかというと騎士だし・・・クリスはわからないけど王子様だから？」

それでも会話をする余裕がある二人は、他の生徒から見れば十分異常だったりする。

そして一時間ほど走り続けた頃、シオンとランスは前方に見慣れた友人の姿を見つけた。

「あれ・・・ユージンとクリス？」

「あいつらかなり先に行ったはずなのに・・・どうしたんだ？」

首を傾げつつも二人に近づけば、その理由は一目瞭然だった。

そこはヘゼルの丘への入り口に当たる場所で、森の中を通る道だ。その道の真ん中にソレはいた。

シオンも書物で読んで知識はあったが初めて目にするその生物。

「なんでこんなところに合成獣（キメラ）が？」

「さあな、でもすんなり通してくれそうにも無いことは間違いない」

溜息まじりに、しかし視線を逸らすことなく合成獣（キメラ）を見

つめ答えるユージン。

獣の体に鳥の嘴をもった頭。翼はないので空を飛ぶことは無いだろうが、鋭そうな爪を持っている。

そんな生き物がこちらを睨みつけ威嚇していた。

「この道を迂回して行くのは・・・無理だよなあ」

ランスの言うように、この道を迂回していくのは得策ではなかった。ヘゼルの丘の位置口にあるこの森は魔物が住む森として有名で、丸腰で入るのは自殺行為とも言える。

かといって合成獣（キメラ）に丸腰で挑むのも十分自殺行為と言えるのだが。

すでにハワードはここを通過した後であろう。

この後ここを通るであろう人間はシオンたち以外の魔術クラスの生徒6名だけだ。これまでの実技での様子からいってここにいる四人より魔力は低く、明らかに実戦経験は皆無だった。

つまり戦力どころか下手をすれば足手まといにもなりうるということだ。

「・・・ランスって実戦経験ってある？」

「んー、まあ一応？」

「そっか・・・俺、経験ないんだよね」

シオンがはぁっと深く溜息をつく横で、ランスは黙々と足元にあ
る手ごろな石を集めていた。

ユージンとクリスも落ち着いていて、焦ったような様子は微塵もない。

「実戦経験がないのなら、下がっていたほうがいいだろう」

「それじゃ俺はコイツのこと見ながら適当に補助するんで、合成獣（キメラ）は二人に任せていいかな？」

「ああ」

クリスが振り返らずに言い、それにランスが同意の意味をこめて返答する。そしてランスの言葉にはユージンが答えた。

シオンは頼もしい友人たちの背中を見守り、守られる立場となる。

実戦経験は皆無。しかも目の前の合成獣（キメラ）は外見もとても恐ろしいもので、普通は恐怖のあまり逃げるところか悲鳴をあげることもできないであろう。

そんな合成獣（キメラ）を目の前にしても、にシオンの心は落ち着いていた。

魔物を見るのは初めてではないが、今まで見たどの魔物よりも恐ろしい外見をしている。

それでも恐怖は感じるが、だからといってその恐怖に囚われることもない。

（うーん、まあいいか。有利になることはあっても不利になることは少なそうだし）

疑問はあれど答えがでるわけでもないので、シオンは考えるのを放棄して目の前の合成獣（キメラ）に集中する。

後ろで守られる形とはいえ、必要以上の負担を三人にかけたくなかった。

今度こそ大切なものを守ると誓ったのに、早々に守られている自分が情けなくて悔しかった。

「いくぞ、ユージン」

「ああ」

短い言葉を交わす二人の背中がシオンには眩しく感じられる。

「大丈夫だ、お前には指一本触れさせやしないさ」

その表情をシオンが怖がっていると勘違いしたらしいランスが、にっと口角を上げてシオンの肩をバシバシと叩く。

「痛いって。頼りに・・・してるよ」

「ははっ、しおらしいな」

「自分が足手まといでしかないことは自覚してるからね」

せめて邪魔にならないように。シオンは前を見つめる。

ランスは少し驚いたような表情になったが、すぐに手にある数個の小石を確かめるように握り締め、視線を戻した。

18 実戦

最初に仕掛けたのはクリスだった。

合成獣（キメラ）に向かって真っ直ぐに走り込む。そのすぐ後にはにユージンが続く。

合成獣（キメラ）が吼え、自分に向かってきた愚かな敵であるクリスに向かってその鋭い爪を振り下ろした。

それはシオンにはやっと目で追える程度の速度であったがクリスはその攻撃を体を捻るだけでかわし、その勢いを利用し頭に向かって蹴りを放つ。

しかし合成獣（キメラ）はその攻撃を振り下ろした腕とは反対の腕で受け止めた。

続けざまにユージンが合成獣（キメラ）が振り下ろした爪の側からその拳を叩きつける。

合成獣（キメラ）もその攻撃は受け止めることも避けることもできず、ユージンの拳はその頭を捉え鈍い音を響かせる。

しかしそれでも合成獣（キメラ）は顔をそらしてダメージを軽減させたようだった。

合成獣（キメラ）が低い呻き声を上げながら再びその鋭い爪でユージンへと襲い掛かるが、ユージンはその攻撃をバックステップで難なく避けた。

しかし合成獣（キメラ）はそれを狙っていたかのように体をくの字に曲げ、その尾で着地前のユージンへと襲い掛かる。

「ちっ……」

ユージンは舌打ちして体を捻りそれを避けるが、尾はその途中から向きを変え先端を二つに割りユージンへ噛み付かんとばかりに襲い掛かる。

ユージンは更に体を捻り避けようとするが、如何せん身動きのとりづらいうちの瞬間である。いくら身体能力に優れたユージンでも無傷で避けることは不可能であるのは一目瞭然の間合だった。

「ユージン！」

シオンが思わず悲鳴にも近い叫び声をあげると、ランスが手でシオンを制した。そしてすっと目を細めたかと思うと、手にした石を合成獣（キメラ）に向かって投げつける。

石は吸い込まれるように合成獣（キメラ）の蛇のような尾に命中し、その攻撃はユージンへは届くことなく僅かに横へと逸れた。

「ランス、助かった」

ユージンが無事着地し、すぐに態勢を立て直し向き直る。

ランスはその言葉に答えるように残りの石を合成獣（キメラ）の顔目掛けて投げつけた。

無駄のない動作から放たれたそれは、見事なまでに合成獣（キメラ）の両目に当たり、合成獣（キメラ）が激しく咆哮する。

その瞬間を二人は見逃さなかった。

すばやくクリスが合成獣（キメラ）の顎を蹴り上げる。

クリスの攻撃を受けて合成獣（キメラ）の上半身が浮き上がり、その首元にユージンが手刀を叩き込んだ。

何かが砕けるような音がして合成獣（キメラ）が動かなくなる。

「終わったか・・・？」

クリスの言葉に、ユージンが合成獣（キメラ）を足で転がし仰向けにする。

合成獣（キメラ）は口から涎をながし、その見開かれた目は濁り何も映してはいなかった。

「・・・そのようだな」

ユージンが答え、それにクリスが頷く。そして二人はシオンとランスの元へと戻ってきた。

「おつかれさん、怪我はないようだな」

ランスが二人に駆け寄り、労う。

それまで呆然と見守っていたシオンだったが、妙な違和感を感じて視線を上げる。

合成獣（キメラ）は動かない。しかし次第に強くなる違和感は間違いない。合成獣（キメラ）から感じられる。

ユージンたち三人はその違和感を感じてはいないようで、なにやら話し込んでいる。

シオンが感じる違和感はさらに強くなり、合成獣（キメラ）を睨み付ける様に見つめていた。

そして違和感が確信へと変わる。

合成獣（キメラ）の目から濁りが消えて再び世界を映し出す。

そして少し開かれたその口には真っ赤な炎が生まれた。

「危ない！」

シオンの叫びに三人が合成獣（キメラ）を振り返る。それと同時に回避行動を取ってはいるが、すでに炎は三人の目前へと迫っていた。間に合わない！と心が冷酷に告げる。

真っ赤に染まる視界と三人の友人たち。

その光景は紫苑の最後の記憶と重なった。

どくり、と心臓が跳ねる。

「あああつ・・・！」

自身を抱え込むように腕をまわすが、押さえきれない感情が魔力となって溢れだす。

その魔力は黒い霧となり迫りくる炎を友人ごと飲み込んだ。

「なんだあ？　なんでこんなところにこんなもんがいるんだ？」

場違いともいえるのんびりとした声が静寂を打ち破る。

次第に黒い霧も霧散し視界も戻り、声の主は武術講師ハワードのものだと気づく。

その足元には真っ二つに両断された合成獣（キメラ）。そしてその手に握られているのは一振りの枝。

次の瞬間には合成獣（キメラ）は黒い煙となって消え、その後に残ったのは二つに割れた赤く濁った石だけだった。

「核・・・そっか、よかった・・・」

それは合成獣（キメラ）の動力源であり命そのもの。
それが破壊されればどんなに回復力が高い合成獣（キメラ）であつてもその体を維持することはできない。

もう合成獣（キメラ）の脅威がなくなつたことを実感したシオンは、その安心感からなんとか保っていた意識を手放した。

とさり、と軽い音がして三人が振り返るとシオンが倒れていた。

「シオン！」

ランスが慌てて駆け寄りシオンが頭を打ちつける前にかろうじて支える。

ユージンがシオンの傍らに膝をつき、その腕をとり脈を測る。

「一気に魔力を放出して疲れが出たんだろう」

「そうか・・・」

やはり心配そうなクリスもほつとしたように息をつく。

「ぱっと見て異常はないようだが念のためお前たちはソイツを連れて学園に戻って保険医にみせてこい」

「ええ、もちろんそのつもりです」

やりのんびりとした様子のハワードに答えたのはクリスだった。

「彼の魔力の霧がなければ私たちも無傷ではいられなかった。彼に何かあつては困りますからね」

「ならば俺がシオンを担ごう。ランスには少々きついだろう」

「コイツやたら軽いから問題ないんだが・・・また何か出てきたら辛いのは確かだな」

クリスの言葉にユージンが深く頷きランスからシオンを受け取る。ランスは少々納得いかないような表情をしつつも素直にユージンの言葉に従った。

「本当なら俺が連れて行ってやるんだが・・・他の生徒もみてやらないといけないからなあ」

「俺たちなら大丈夫ですから構いません」

「ま・・・お前らなら大丈夫だろうな。下手な騎士クラスの連中よりよっぽど使えるな」

トントンと肩を手にした枝で叩きつつ、ハワードは四人を見やる。そしてシオンをすうっと目を細めて見つめた。

「さあさっさと戻れ。他の生徒が到着したら俺もすぐ戻るからな」
「はい」

もと来た道を三人はそれまでの疲れなどないように走っていた。しばらく走ってランスがぼつりと口を開いた。

「シオンがこの状況を知ったらなんていうだろうなあ・・・」

ランスの前を走るユージンとクリス。シオンはユージンにお姫様抱っこされた状態だ。

自分が同じ立場であったなら死にたくなる。そうランスはシオンに同情しつつも、何とも言えない少々複雑な心境だった。

しかしその状態で小走りに近いとはいえ難なく走っているユージンの体力に感心もするランスだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699n/>

クレセント

2011年10月21日15時02分発行